

1. 最近のニュースや話題から徒然に

◆「熱意ある社員」6%のみ！ 本当か？

日経新聞 5 月 26 日（金）の見出しがこれ！ 米ギャップ社が 139 カ国に「仕事への熱意度」調査をした結果で、なんと日本は 132 位だったという。32%だった米国の 1/5 でしかない。一方で、企業内で諸問題を生む「**周囲に不満をまき散らしている無気力な社員**」は 24%、「**やる気のない社員**」は 70%にも達しているらしい。

こんな状況では 24 時間・365 日戦っている経営者は浮かばれない。このホットレターを受け取っている会社では、「当社にはこの調査結果は当てはまらない」と信じたい。

「じんざい」は「人財・人剤」、「人材」、「人済・人在・人罪・人災」と 3 つに区分する事が可能だ。人財・人剤は会社に貢献してくれるが、人済がゴリーのじんざいは会社業績に足を引っ張っている輩達である。

2-6-2 の法則という人事対応がある。当職は左辺 2 割のじんざいが、人財以下のじんざいに適合すると信じているのだが、ギャップ社の調査ではわずか 6%。日本経済の体たらくを診ればガッテンしたい気もする。何とかしなければ、と溜息が出る。

ギャップ社は指摘する。「**部下を成長させることが上司の仕事**」。当然至極の指摘である。その為に「部下の強みを理解すること」と続けている。弱み改善に注力するのではなく、強みをもっと活かせるようにしようという。これもごもつともな説。

人事権は労働契約と共に付帯的に会社は得る。「この社員の能力を活かし、営業力の底上げを」と期待し人事異動を発令する。しかし当の社員は「何故？」と反論する。「強みを活かそう」と人事を工夫するも、社員はこれに反発する例も発生している。

このように人事は難しい。しかし**企業力 UP の為に伝家の宝刀、人事権を使うことは必要だ。悩ましい問題を抱えつつ、「熱意ある社員」の増殖を願うしかない。**

2. 継続的な繁栄（継栄）を目指して

□基礎を徹底的に鍛える

スポーツの話題を 3 つほど。テニスの 4 大大会である全仏オープンが終了。錦織は準々決勝で敗退。大事な道具であるラケットを投げつけたとも。今年是不調のようだが、大リーグのイチローはバットを投げつけるだろうか？ 肉食系の欧米選手に勝つために体幹を鍛えるべきという話を聞いたが、「**大人の職業感（フコ意識）を持つ**」ことが大切ではと感じた次第。

2 つ目は全仏と同時期に開催され、国民の注目を浴びたドイツ開催の世界卓球（卓球の英語表記はテブ~~ル~~ニス）。混合ダブルスで金など目覚ましい活躍だった日本選手。特に 10 代の若手が活躍し 2020 年の東京オリンピックで「幾つメダルが取れるか」と胸算用した。過去は輝かしい戦績を残していた卓球界だが、福原愛の登場まではマイナー（？）な競技へ転落。卓球を愛する全員の努力が結実したのがドイツ大会。基本練習の繰返し、繰返し、そして繰返し。単調な練習の繰返し。しかし練習の成果を信じつつ、先（未来）に照準を合わせての練習。

基本が大事ということを再認識した。

最後は大リーグ・アストロズの青木選手。日米通算で 2000 本安打を達成した。大リーグに挑戦した選手での偉業達成は、イチローと松井と青木の 3 名のみ。青木選手は 6 年の大リーグ生活でアストロズは 5 球団目という。イチローや松井の様に、一球団に数年腰をすえて安打を量産という訳ではない。常時、移籍という不利な環境下での 2000 本安打。これも価値がありそうだ。

TV 報道を観てふと思う。「しかしイチローはもっと凄い」。大リーグでの安打数は 3046 本、日米通算では 4324 本。足掛け 25 年の成績。**地道に、コツコツと、先を見て、信念を持ち、雑念を持たず、一途に打ち込む。**イチローを始め、凄い戦績を残しているスポーツ選手に学ぶところは多そうだ。